

長江文学会「土曜文芸」『長江文学』細目

— 日本統治下上海の邦語文芸雑誌一斑 —

木田 隆文*

要 旨

長江文学会は日本統治下の上海で活動した邦人文学団体である。一九四〇年九月から四二年五月ごろまでの二年弱の間に、現地発行の邦字新聞『大陸新報』紙上に「土曜文芸」欄を掲載し、のち機関誌『長江文学』を五号まで発行した。活動期間こそ短かったが、同会は在滬日本人文学者を組織化した最初の文芸団体であり、かつ汪兆銘政権寄りの日中文学者を糾合した上海文学研究会の前身を形成した点で注目される。本稿はその「土曜文芸」「長江文学」の細目と解題を紹介することで、同時期上海の邦人文壇に関する基礎情報を提出するものである。

一 戦時下中支地域の日本語文学とその研究状況

昭和戦前・戦中期の中国大陸では、複数の邦人文学団体が結成され、またいくつもの日本語文芸雑誌が編まれた。そのうち旧満州地域の文学状況については、尾崎秀樹「満洲国」における文学の種々相^{〔1〕}以

後、多くの論者が検討を重ねてきた。またそれに伴い『満洲浪漫』『藝文』^{〔2〕}などの雑誌の復刻や、『日本植民地文学精選集』^{〔3〕}をはじめとする作品集の刊行など、基礎的な研究環境の整備が進められ、それがさるなる研究の進展を生んでいる。

しかし満州と同様、多数の日本人居留民が暮らした中支地域―特に上海・南京を中心とする汪兆銘勢力下―の日本語文学状況は、前者に比してさほど検討が進んでいない。たとえば草野心平が南京で『黄鳥』を、上海では『亜細亜』を刊行していたことは周知のことであり、また大橋毅彦^{〔4〕}が指摘するように、戦時下上海発行の邦字新聞『大陸新報』には、上海を中心とする中支各地に複数の邦人文芸団体があったことが記されている。にもかかわらず戦時下中支地域の文学状況の検討が進まないのは、研究の基盤となる文学雑誌の発掘や実態調査が進展していないところに一因があると思われる。ただそうした状況は、ここ数年で変化を見せ始めてもいる。一例を挙げれば、趙夢雲が一九四三年から四五年まで上海で刊行された『上海文学』を発掘、同誌の概要と発行主体である上海文学研究会の概要を明らかにした^{〔5〕}。また相前後

して論者も『上海文学』掲載の武田泰淳の作品に関して拙稿をなした。⁽⁶⁾ こうした状況は、長らく等閑視されてきた戦時下中支地域における邦人文学状況の解明にむけて、資料的な基礎整備とその意味付けが始まったことを示している。

ところで筆者は、先ごろ『長江文学』と題する日本語文芸雑誌を一冊入手した(図1)。一九四二年五月の上海で発行されたもので、い

うまでもなく国内外の機関に所蔵は確認されてはいない。同誌を発行した長江文学会は、一九四〇年九月一日から一九四一年四月一二日まで『大陸新報』紙上の「土曜文芸」欄を発表の場として活動を行い、ついで一九四一年六月ごろには機関誌『長江文学』を刊行、一九四二年五月ごろ同誌第五号を発行後に解散した文芸団体で



図1 『長江文学』第5号 表紙

ある。同会解散の翌年に上海文学研究会が結成され、かつ主要同人の移動が見られることから、長江文学会は上海文学会の前身であることは間違いがないだろう。つまり長江文学会の活動を確認することは、これまで検討が及ばなかった『上海文学』発行以前の上海邦人文壇の状況と、その形成過程を検討する有益な示唆を与えてくれると思われるのである。

なお長江文学会はこれまでまったく知られていなかったわけではない。先述の大橋論は『大陸新報』の文化記事を紹介するなかで、「土曜文芸」の部分的な紹介を行い、長江文学会の存在にも言及している。しかし同論の趣旨は『大陸新報』の資料的価値の紹介におかれたため、全体的な細目紹介はなされていなかった。また執筆時に『長江文学』の現物が見出されていなかったため、同誌の書誌的事項に対する言及もなかった。

そこで本稿は、大橋・趙両氏の追補になるのを承知で、「土曜文芸」『長江文学』の解題・細目を挙げ、あわせて長江文学会の簡単な紹介を示しておきたい。私見ながら長江文学会は、組織化された性格を持つ文芸団体としては上海最初のものであり、その性格は多分に国策的であった。それはおなじく上海にあった内山完造の文芸漫談会のような、自然発生的な文化人の集合体とは質を異にする。以下に示す情報、それら輻輳した戦時下上海の文学状況を解明する基礎資料になることを期待するものである。⁽⁷⁾

二 「土曜文芸」解題・細目

二一 「土曜文芸」解題

一九四〇年九月一日（第一号）～四二年四月二日（第二十九号）。全二九回。週刊（土曜日掲載）。いずれも『大陸新報』の文芸欄として同紙朝刊第八面上半分に掲載。毎号のタイトルに「土曜文芸」とあり、その下に「長江文学会」の記名がある。掲載媒体である『大陸新報』の発行所は大陸新報社（上海・西華徳路二八八号）。

同欄の編輯委員は蘇我邦衛・二藤二雄・高木喬・大木富作・伊江田比呂志（第二十九号「土曜文芸終刊の挨拶」による）。会長は野上五郎。

ただし野上の名は第一六回まで登場せず、また第二一回には辞任した旨が記されているため、その前後の会長は未詳。事務所（連絡先）は発行当初は会員の小泉譲宅におかれ、のち三九年一〇月ごろには日本工業新聞社上海支局内（虹口海寧路一五一号）に移転。会結成の当初は「土曜文芸」での創作活動と並行して、会員向けの定例研究会や月曜懇談会と呼ばれる催しを実施していたが、それらは三通書局三階集會室（北四川路文路）を会場とした。

開始当初の紙面は、高木喬（『高橋良三・中日文化協会上海分會理事』）や小泉譲（小説家）など、主要な在滬文化人の論説に、一般市民の詩や小品が加えられる構成をとった。しかし野上会長の「再出発の感想」が掲載された第一六回から、突然その方向性を転換、一般同人と思われる会員は紙面から消え、内容も急速に翼賛色を強めてゆく。こ

の軌道修正がとられた理由は確認できないが、大陸新報社が陸軍省・海軍省・興亜院の後援によって創刊された御用新聞社であったことを勘案すると、市民文芸欄へと傾斜する会の方向性を、大陸新報社が翼賛的傾向へと引き戻したと考えられよう。そしてその翼賛的な傾向は、後述する『長江文学』の性格にも引き継がれてゆくのである。

二二 「土曜文芸」細目

【凡例】 各細目は 執筆者名＋タイトル＋（内容）＋※注記 の順で示した。

（ ） 内の内容区分は論者が判断した。□は判読不能を示す。

第一回 一九四〇（昭和二五）年九月一四日

高木喬 現地文学の課題（評論）

浅田耕 南京の印象（紀行）

岸川武雄 詩「女 夕焼け 病」（詩） ※短詩三編

牟田龍二 熱帯魚（俳句）

□・〇・〇 名翻訳（評論）

□尾比呂夫 科学精神の実践化（評論）

小泉譲 日本のなもの（評論）

無署名 巷の話題（随筆） ※会結成の背景を示す

無署名 同人募集（告知） ※募集告知

無署名 読者の声（告知） ※読者欄開設予告

第二回 一九四〇（昭和一五）年九月二二日

國見由紀夫 掌編 うわさ （小説）

高橋江春 虹口の子等 （詩） ※短詩三編 名前誤植（春江）

柳田音吉 スケッチ・ブック （随筆）

浅田耕 「馬々虎々」聖壇に踏込んだ野人 （評論）

※中野重治評

清松暢 上海と文芸運動 （評論）

無署名 同人募集 （告知） ※連絡先は小泉譲宅

無署名 反響に答へて （告知） ※懇談会開催の計画

第三回 一九四〇（昭和一五）年九月二八日

高木喬 現地作品の性格 （評論）

清松暢 糞尿閑話 （随筆）

小泉譲 「馬々虎々」時代の小説家 （評論）

浅田耕 長江文学の出版 （評論）

編集部 長江文学会懇談会開催 （告知） ※九月二九日開催

□□□ 読者の声 （雑報）

第四回 一九四〇（昭和一五）年一〇月五日 ※この号・韻文特集

二藤二雄 詩と擁護―自らに、そして友に （評論）

※文末に（一〇・一）

高塚土筆 雑詠 （短歌）

※五首

高橋春江 金魚（俳句） ※四句

尾崎徳 詩篇、哀悼譜（詩） ※文末に（一五・九・二八）

岸川武雄 詩二篇（恋人 女）（詩）

草路春夫 季節への招待（詩） ※文末に（一九三九・三・二八）

吉村秀聲 漁りの歌（訳詞）

草路春夫 季節のよる（詩）

尾崎徳 掌・歌曲（詩） ※文末に、一五・□・一九

小庭千代 指の愛情（詩）

國見由紀夫 巷の眼（詩） ※文末に（九・一四）

中原直 青年の歌（東亜の旗に）（詩）

清松暢 租界（詩） ※文末に（昭・一五・一〇・一）

二藤二雄 旗・蟹・星（詩）

尾崎徳 蟹工船（詩）

無署名 長江文学会事務所新設（告知）

第五回 一九四〇（昭和一五）年一〇月一二日

中嶋徳之助 批判と反批判 芸について （評論）

※高木喬「現地作品の性格」への批判

高木喬 芸は身を援けるか（評論） ※中嶋徳之助への反論

牟田龍二 萬壽沙華（俳句） ※四句

小泉譲 「馬々虎々」浪漫主義文学台頭（評論）

岸川武雄 秋（小説）

無署名 二行言 (雑報)
無署名 編輯部報 (告知)

※長江文学原稿締切・研究会場新設の案内

第六回 一九四〇(昭和一五)年一月一九日 コント特輯

小泉譲 風俗時評 (コント)

多田裕計 中華民国の鶏 (コント)

柳田音吉 あるおつさんの話 (コント)

二藤二雄 敵性女人 (コント)

國見由紀夫 靴 (コント)

第七回 一九四〇(昭和一五)年一月二六日

江川久美子 近所の子供達 (小説)

西樹秀子 金魚 (小説)

梓雲平 黄土の崖 暗い草むら (詩)

吉川義雄 コスモスの花 (短歌) ※七首

二藤二雄 同人雑記 (雑報)

無署名 編輯部たより (告知)

二藤 編輯後記

第八回 一九四〇(昭和一五)年一月二日

清松暢 詩への随想 (随筆)

高橋春江 日曜日 私 失われた靴 (詩)

浅田耕 随筆 上海と芸人 (随筆)

尾崎徳 従軍詩篇 黄昏図(戦死 便り) (詩)

浅田生 最初の懇談会 (雑報) ※会主催懇談会の報告

無署名 ピクニック記 (雑報) ※会員親睦ピクニックの報告

二藤 編輯後記

第九回 一九四〇(昭和一五)年一月九日

高木喬 作品の売値と創作方法 (随筆)

岸川武雄 ふらぐめんとー或ひはKのグリンプス (コント)

兼松信夫 風景 (詩)

二藤二雄 皇紀二千六百年奉祝詩の一章 貝殻の章 (詩)

二藤二雄 同人雑記 (雑報)

二藤 編輯後記

第一〇回 一九四〇(昭和一五)年一月一六日

江古川勉 上海日記抄 (随筆)

白石浩一 心の壺—G・M君へ— (詩)

野中愛三 汽車の中 (小説)

二藤 編輯後記 ※今号は新人号とあり

第十一回 一九四〇(昭和一五)年一月二三日

吉村秀聲 さざなみ (小説)

加藤清由 情熱がかける (俳句) ※七句

西樹秀子 女車掌 (小説)

無署名 第四回定例月曜懇談会予告 (告知)

第一二回 一九四〇(昭和一五)年十一月三〇日

小泉讓 ある季節 (小説)

高木喬 断片語—詩・論集『日常の詩』より— (評論)

無署名 『日常の詩』出版記念会 (雑報)

※『日常の詩』より抜粋・転載
※同書出版記念会記事・写真あり

無署名 編輯後記

第一三回 一九四〇(昭和一五)年二月七日

西樹秀子 今年の秋 (小説)

江川くみ 久子ちゃんのこと お母様方へさ、やかな、おくりもの (随筆)

無署名 第六回日曜懇談会予告 (告知) ※日曜は月曜の誤り

第一四回 一九四〇(昭和一五)年二月一四日

本多恭之 無題 (小説)

清松暢 朝の黄包車 (随筆)

無署名 第七回定例月曜懇談会 (告知)

第一五回 一九四〇(昭和一五)年二月二日

中村芳夫 義齒 (小説)

尾崎徳 戦争 (詩)

見駱駝者 話の味 — 間話の一つ (随筆)

無署名 編輯後記 ※定例月曜懇談会、休止の知らせ

第一六回 一九四一(昭和一六)年一月二日 ※再出發号

長江文学会 宣言 規約 ※長江文学会の新陣容と新規約

野上五郎 再出發の感想 (評論)

吉村秀聲 「長江文学」の発刊について (告知)

草路春夫 頌歌 (詩)

牧上研 戦塵 (詩)

國見由紀夫 新体制の春 (評論)

無署名 編輯後記

第一七回 一九四一(昭和一六)年一月一八日

田弘 [評論] 現地文化の貧困 その批判者へ (評論)

草路春夫 [掌篇] 軟風 (小説)

梓雲平 [随筆] 莫愁湖畔にて (随筆)

庶務係 会報 (告知)

第一八回 一九四一（昭和一六）年一月二五日

浅田耕 現地文化と知識人―ある批判に寄せる （評論）

清松暢 「童詩」ストープの花 （詩）

無署名 現地インテリ気質 （随筆）

田弘 高野隆君へ （随筆）

小泉譲 「随筆」遠山君と小説『呉淞クリーク』（随筆）

無署名 次回月曜懇談会予告 （雑報）

無署名 編輯後記

第一九回 一九四一（昭和一六）年二月二日

小泉譲 文学偶感 （評論）

二藤二雄 詩集遺書に就て （評論）

柳田音吉 隣室の女（崑山莊雜記） （小説）

加藤清由 しんじつにして （俳句） ※六句

無署名 編輯後記

第二〇回 一九四一（昭和一六）年二月八日

田弘 中国流行歌集 （評論） ※流行歌歌詞収録

柳田音吉 皮肉 ― 老文学生へ （評論）

中島徳之助 虹口の曇天 （随筆）

長江文学会 長江文学会緊急総会開催に就いて （告知）

無署名 『世界最終戦論』（石原莞爾著）（書評）

無署名 消息 （雑報）

無署名 編輯後記

第二一回 一九四一（昭和一六）年二月一五日

吉川憲一 シヤツ （小説）

二藤二雄 宣撫日記 （随筆）

田弘 中国流行歌集（三） （評論） ※連番正しくは（二）

無署名 新人の出現を待つ！ （告知） ※投稿規定

無署名 お知らせ （雑報）

※会長野上五郎退会・「長江文学」発刊延期の報

無署名 編輯後記

第二二回 一九四一（昭和一六）年二月二二日

吉村秀聲 狐（きつね） （小説）

淵川涉 透明なる戯画 （詩）

三浦桂祐 英兵撤退 （短歌）

尾崎徳 麦踏み （詩）

林正元 名優荀慧生のことども （評論）

無署名 編集後記

第二三回 一九四一（昭和一六）年三月一日

本多恭之 「創作」早春 （小説）

諸岡徳治 詩二篇（海軍巡邏兵 歩哨）（詩）

田洪 中国流行歌集（三）（評論）

※執筆者、正しくは田弘

大木富作 長江文学とローカル色（評論）

無署名 編集後記

第二四回 一九四一（昭和一六）年三月八日

大木富作 歳月（としつき）（小説）

北村彌一郎 鶴の姿（短歌）※巻末に（蘇州文学から）とあり

蘇我邦衛 『蘇州文学』の飛躍（評論）

※雑誌『蘇州文学』細目あり

第二五回 一九四一（昭和一六）年三月二五日

國見由紀夫 再会（小説）

二藤二雄 〔詩三章〕新生三月（掌光土）（詩）

島影清 中国人との交流の必要（随筆）

※『蘇州文学』その他雑誌名あり

無署名 事務所移転通知（告知）

無署名 投稿を歓迎す（告知）

無署名 編輯後記 ※「上海歌人」創刊の旨

第二六回 一九四一（昭和一六）年三月二二日 ※号数「廿五回」と誤記

葦田秀穂 帽子（小説）

石丸照義 春濁世相（短歌）※六首

吉村秀聲 物を書くエチケツト（随筆）

無署名 新事務所の開設（告知）

無署名 投稿を歓迎す（告知）

無署名 長江文学会揭示（告知）

※会員に対し、会費徴収の実施と四〇枚以内の作品の提出を
求める旨を告知

無署名 編輯後記 ※藤森成吉来滬の旨

第二七回 一九四一（昭和一六）年三月二九日 ※号数「廿六回」と誤記

野中愛三 大緑公司（小説）

吉村秀聲 将来の日本の演劇―藤森氏の土産話（評論）

外山成一 水仙の花束（小説）

長江文学会 会員に告ぐ（告知）※長江文学執筆規定

第二八回 一九四一（昭和一六）年四月五日 ※号数「廿七回」と誤記

岡田るい子 書信（小説）

諸岡徳治 文学と文化―長江雑誌より（評論）

※日華共同制作などの提案

無署名 揭示板（告知）

無署名 編輯後記

第二九回 一九四一（昭和一六）年四月二日

※終刊号。号数「廿八回」と誤記

本多恭之 香蕉（小説）

千葉富貴子 青島の思ひ出（詩）

梓雲平 黄包車（詩）

尾崎徳 『長江文学』への愛情（随筆） ※内地からの寄稿

土曜文芸編輯委員（蘇我邦衛 二藤二雄 高木喬 大木富作 伊江

田比呂志） 土曜文芸終刊の挨拶

無署名 編輯後記

三 『長江文学』 解題・細目

三―『長江文学』 解題

第一巻第一号（一九四一年六月？）～第二巻第二号（一九四二年五月）。季刊。終刊時は未詳だが、『大陸新報』に第五号以後の発刊を伝える記事がないため、全五冊と推定される。

今回見出された第五号は、菊版（縦二二センチ、横一五・二センチ）。本文六四頁。表見返しに目次、裏見返しに「編輯後記」・奥付あり。奥付装丁・カットは北富三郎。奥付によれば一九四二（昭和五年五月五日印刷、同一〇日発行。編集兼印刷兼発行人・高橋良三（注・高木喬）、印刷所・大陸印刷局（上海乍浦路四五五号）、発行所・長江

文学会（上海北四川路公益坊一二〇七号）。頒価一部五十銭。なお奥付には価格が付されるものの「本誌は会員及び会友に限り頒布するものとす」との文言がみえるところから、市販はなかったと考えられる（図2）。

同誌の内容は「土曜文芸」より小説の比重が大きくなっている。これは新聞文芸欄であったそれに比べ掲載スペースが拡大されたためであろう。そこからは、同誌の発行が中・長編小説を掲載する必然性に迫られたものだったことも想定させる。また同誌の特色として挙げられるのは広告が一切ないことである。このことについて『大陸新報』掲載のコラム「南船北馬」は「さうすると之れを発行する会員の負担も相当のものであるその点でこういうふ良い意味の企画が単なる経済的

目次	
黄塵……………小濱千代子	ハ
收穫以前……………小泉 謙	三
草庵を植える……………三浦桂樹	二
大東亞戦下の現地文學……………志摩雅夫	四
花のたより……………高橋春江	セ
この頃の生活から……………岡田頼子	四
編輯者の言葉……………空	空
編輯後記……………空	空
表紙・カット……………北富三郎	

昭和十七年五月五日印刷 昭和十七年五月十日發行	編輯兼 發行兼 印刷人 高橋良三	印刷所 大陸印刷局 上海乍浦路四五五號	發行所 長江文学會 上海北四川路公益坊一二〇七號	頒価 一部五十銭
本誌は会員及び会友に限り頒布するものとす				

図2 『長江文学』第5号
目次（上）・奥付（下）

な原因だけで行き詰ることを怕れる」と危惧し、有志による援助の必要を説いてもいるが、実際は大陸新報社からの発行援助があったと考えるほうが自然であろう。たとえば同誌の印刷所である大陸印刷局が大陸新報社の関連企業であることもそれを裏付けている。そしてこの大陸新報社との関係性は、「土曜文芸」に見られた翼賛体質が『長江文学』にも引き継がれていることを意味していよう。実際この号には、小泉譲の小説「収穫以前」が掲載されているが、これはのちに第一七回（昭和一八年上半年）芥川賞候補にもなった「桑園地帯」（『上海文学』（春季作品）創刊号 一九四三・四）の前章となる作品である⁽¹⁰⁾。従ってその内容は「桑園地帯」と同じく中国人職員とともに養蚕場建設に奮闘する青年を描くものであり、小泉らしいメロドラマ的要素は含まれているものの、開拓・生産文学の枠組みを外れるものではない。こうした例は、現地作家と内地の文芸政策の極めて緊密な連携を見せるものであり、長江文学会の文学的方向性が、現地独自の文学を生み出すところにはなかったことを示してもいよう。

なお『大陸新報』には『長江文学』に関する書評記事が出ている。これらは現在未発見の号の内容を伝えている場合があり、後述の細目のうち第五号以外はそこから確認した。またこれら記事は長江文学会の活動が現地社会にどのように受容されたのかを確認する資料としても重要である。その検討は別稿に譲るが、資料紹介も兼ねて以下に記事名のみ挙げておく。

小泉譲「小説の虚弱性―『長江文学』を読む（上）（中）（下）」

（一九四一・一〇・二三、一四、一五 第四面）

古川六郎「長江文学の作品―自己批判的に（一）（二）（三）」

（一九四一・一一・三〇、一二・一、四 第四面）

猛田章「長江文学を読む（五月号）」

（一九四二・六・六 第四面）

太木「〔総力報国の声〕現地文学における民族問題（上）（中）（下）」

（一九四二・六・二五、二六、二七 第四面）

長江文学会は『長江文学』第五号を刊行後に解散、上海文学研究会へと発展的解消を遂げた。その理由を同人の一人であった武田芳一（猛田章）は、同人中にゾルゲ事件に連座したものがいたためだと証言している⁽¹¹⁾。現時点でその事実関係は未詳であるが、今回示した細目が、それら現地文壇の様々な事情を説明する手がかりとなることを期待したい。

三―二『長江文学』細目

第一卷第一号 第一冊（一九四一年六月頃発行）

※内容未詳。発行月等は「〔南船北馬〕『長江文学』の誕生」（『大陸新報』一九六一・六・一〇）に拠る。

第一卷第二号（新秋号） 第二冊（一九四一年九月頃発行）

國見由紀夫 東洋兵

江川久美 一つの寶

野中愛三 部落民

兼松信夫 松井通

二藤二雄 どれいゝの民はかなしや

蘇我邦衛 中支文化聯盟の提唱

新納浩 私と文学

西樹秀子 先生とトマト

猛田章 ねずみの愚痴

高橋春江 街路樹

高木喬・其他 現地的典型の創造

※内容未見。書誌・作品名等は「新刊紹介」(『大陸新報』一九六一・九・一八)に拠る。

第一卷第三号 第三冊 (一九四一年二月頃発行)

本多恭之 老父 (小説)

石田正衛 支那人性格の把握に就て (評論)

猛田章 仕事 (小説)

※内容未見。作品名・発行時期は古川六郎「長江文学の作品」(一)(二)(三)「(『大陸新報』一九四一・一一・三〇、同二二・一、同二二・三)に拠る。

第二卷第一号 第四冊 (一九四二年二月頃?発行)

小泉譲 海の色 (小説)

※掲載作品名は猛田章「長江文学を読む(五月号)」(『大陸新報』一九四二・

六・六の記述に拠る。

第二卷第二号 第五冊 (一九四二年五月五日印刷 五月一〇日発行)

三浦桂祐 篋麻を植ゑる (随筆)

志摩雅夫 大東亜戦下の現地文学 (評論) ※筆者は島田政雄

高橋春江 花のたより (詩)

小濱千代子 黄塵 (小説)

小泉譲 収獲以前 (小説) ※「桑園地帯」第一部とあり

岡田類子 この頃の生活から (随筆) ※目次では著者名が「頼子」

無署名 編輯者の言葉

喬 編輯後記

注

(1) 尾崎秀樹「満洲国」における文学の種々相」(『文学』一九六三・二、五、六、一九六六・二)

(2) 呂元明・鈴木貞美・劉建輝編『満洲浪曼』(二〇〇二・七 ゆまに書房) 同編『藝文』(二〇〇八・七 ゆまに書房)

(3) 河原功・白川豊・杉野要吉編『日本植民地文学精選集』第一期(『満洲編』(二〇〇〇・九 ゆまに書房)。なお同選集は満洲編の他に朝鮮編・台湾編・南洋群島編・樺太編があるが、上海および中支地域は対象に含まれていない。

(4) 大橋毅彦「邦字新聞『大陸新報』瞥見」(『昭和文学研究』第三九集 一九九九・九)

- (5) 趙夢雲「『上海文学』とその同人たち―戦時上海邦人文学活動研究へのアプローチ」(『中国文化研究』第二七号 二〇一一・三) なお同論文には『長江文学』の後誌である『上海文学』の細目が付されている。
- (6) 拙稿「武田泰淳「中秋節の頃(上)」の周辺―日本統治下上海における邦人文学界の状況」(『日本近代文学』第八五集 二〇一一・一一)
- (7) 本稿は資料紹介に力点を置いたが、長江文学会の動向と上海邦人文壇の形成過程に関しては別稿の用意がある(木村一信他編『〈外地〉文学の射程』二〇一二年五月 双文社出版 収録・刊行予定)。
- (8) 山本武利『朝日新聞の中国侵略』(二〇一一・二 文藝春秋)
- (9) 「『南船北馬』『長江文学』の誕生」(『大陸新報』一九四一・六・一〇 第四面) なお同欄の執筆者名は判読不能。「國土」か?
- (10) 同作品の最後に「(『桑園地帯』第一部)」と記されていることから判断できる。
- (11) 武田芳一『黒い米』(一九六三・六 のじぎく文庫)

"Doyou-bungei" "Choukou-bungaku" table of contents

—The Japanese literary magazine published in Shanghai under Japanese rule—

Takafumi KIDA